『聊斎志異』と江戸小説

（要約）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D193578

氏　　名：周新慧

江戸時代後期の商業出版に組み込まれた戯作は、売れるものになった。作者と版元にとって、戯作は趣味のものではなく、商品として売れるものとなった。そのためには、費用を回収できることが重要な問題である。商品化するためには、読者が納得できるもの、即ち、読者の需要に合った内容であること、また幕府の取り締まる法令に違反しないという二つのポイントがある。本論文はこの二つのポイントに焦点を当て、『聊斎志異』と江戸戯作の関連を明らかにしようとしたものである。

序章では研究の目的、研究史について述べた。『聊斎志異』の成立と日本伝来の歴史、知識人の受容に関する先行研究を踏まえた上で、論文の全体構成を説明した。

第一章（「『聊斎志異』伝来の初期－政治論理を付与した怪異譚について－」）では、都賀庭鐘の前期読本『莠句冊』と森島中良の江戸初期読本『凩草紙』に焦点を当て、『莠句冊』の第三編「求塚俗説の異同、塚神の霊問答の話」と『聊斎志異』の「恒娘」との関連性、そして『凩草紙』における作者の改作意図について検討した。「恒娘」の本文において政治を批判する意図は見られない。異史氏曰の部分で、蒲松齢は恒娘が朱氏を助けて男の心を取り戻す内容を臣が権謀をもてあそぶことに喩えた。「求塚俗説の異同、塚神の霊問答の話」における政治的色彩を帯びた筋立ては、都賀庭鐘が「恒娘」を十分に分析した上での創作なのである。『凩草紙』は、全九話中七話が『聊斎志異』を粉本としているが、中良の改作から、江戸時代における因果応報観念の流行、幕府の幕臣に対する「文武奨励」の政策、理想的な武士像の様子がわかる。こうした分析から、『聊斎志異』が伝来された初期、寛政の改革の実行前、また実行初期の段階で、政治的色彩が

強い後期の翻案作品と異なる特徴が見られることを指摘した。

第二章（「『邂逅物語』と「大男」－妻妾易位の妬婦譚を中心に－」）では、『聊斎志異』の「大男」と比較し、構成と行文の面から、作者雲府観天歩が典拠を丸ごと翻訳的に利用しながら五巻の長編を創作し、前期読本の中国臭が強い和漢混淆文と異なり、和文の様式を見せたことを指摘した。しかし、『邂逅物語』はあくまでも「擬似」長編に止まる。複数の伏線を絡み合わせながら、粉本を融合するという本格的な期読本の構成原理と異なり、『邂逅物語』は「大男」をそのまま物語の枠組として、ほぼ直訳のかたちを取っている形も明らかに窺える。その一方、「大男」と『邂逅物語』との間には、創作意図の質的な差異が見出せる。この作者の新たな構想から寛政の改革の影響を明らかにした。

第三章（「曲亭馬琴と『聊斎志異』－『押絵鳥痴漢高名』と「書痴」の比較を中心に－」）では、従来の「雅の層」向きの読本とは大きく異なり、大衆読者向きの黄表紙を切り口として『聊斎志異』の翻案に考察を加えた。曲亭馬琴は『押絵鳥痴漢高名』において『聊斎志異』の「書痴」を利用する一方で、以前のように『聊斎志異』の翻案作品が典拠を丸ごと、ほとんど改変せず踏襲したものと異なり、その前半を馬琴自身が創作している。馬琴は『聊斎志異』に物語の大枠を借りて翻案しているが、筋立てと人物造形からは、筋書きを借りた形跡がほとんど見られないという馬琴の巧妙な翻案手法を確認することができた。蒲松齢は「書痴」を通して、当時の科挙制度と清朝政府への批判を行い、勧善懲悪の思想を提唱していたと考えられる。しかし、勧善懲悪を好む馬琴は「書痴」の趣向を用いなかった。本章では馬琴が趣向を改めた理由について、江戸には科挙がないという制度の相違にとどまらず、寛政の改革の影響があることを指摘した。

第四章（「「蓮香」翻案の系譜ー「狐精鬼霊冤情を訴ふる話」と『褄重思乱菊』を中心にー」）では、『聊斎志異』の「蓮香」、『怪異前席夜話』の「狐精鬼霊冤情を訴ふる話」と『褄重思乱菊』を具体的に比較し、三作の異同に着目した。寛政２年（1790）に刊行された反古斎の『怪異前席夜話』は、江戸出来の「奇談もの」の中で独自の魅力を持つ一作である。文政９年（1826）に刊行された、関亭伝笑の合巻『褄重思乱菊』は、『怪異前席夜話』の第二話、『聊斎志異』の「蓮香」の翻案である「狐精鬼霊冤情を訴ふる話」と同じく、主人公と二人の異類女性との三角関係を描く物語である。「狐精鬼霊」と『褄重思乱菊』の両者は共通点が多いという論述は、先行研究においてもすでに見られる。しかし、狐女が人間の男性のために子供を生むという脇筋から、本章では『褄重思乱菊』が「蓮香」と「狐精鬼霊」の両方を素材としていることを指摘した。「狐精鬼霊」と『褄重思乱菊』は同じく「蓮香」を素材とした翻案作品であるが、翻案方法と作風に大きな相違がある。『褄重思乱菊』は「蓮香」、「狐精鬼霊」と『蘆屋道満大内鑑』を組み合わせて、江戸の読者に向けて作り上げた小説である。一方、反古斎にも粉本に学びつつ、その上に創意を加える意図もあるが、「蓮香」に依拠する傾向が強い。そのほか、『褄重思乱菊』には難解な漢字が多く、文を主とし画を従とする特徴から、大衆読者を十分配慮していないことが明らかとなった。蒲松齢は「蓮香」を通して現実には実在しない理想的な女性像を描き出す趣向であるのに対し、「狐精鬼霊」と『褄重思乱菊』は敵討ちの因子を付け加えることで、読者に教訓を与える目的を実現し、勧善懲悪の理念を提唱している。本稿では両者における趣向の相違を指摘した。

第五章（「『みめより草紙』と「瑞雲」の比較研究ー醜女変身の物語」）では、

笠亭仙果の合巻『みめより草紙』と『聊斎志異』の「瑞雲」との関連性と趣向の異同について考察を加えた。『みめより草紙』と「瑞雲」において女性の主人公、阿光、瑞雲は苦境に陥る醜女として描かれており、男性の主人公、鴻太郎と賀生は醜女を見捨てぬ優れた人物に設定されており、その人物造形において共通点がある。また、主人公たちの行為に感動させられた仙人が現れ、妙薬を水に入れて、その水で洗った女性の主人公を美人に変身させ、最後に仙人が姿を消す筋立てに関しては、両作はほぼ一致することが確認できる。そのほか、仙果は「瑞雲」の知己の愛への謳歌という趣向を、容貌の美しさより心の美しさのほうが大切であるという教訓的なものに改作し、粉本にない、主人公と対立する悪役を登場させ、悪役に罰を与え、主人公に褒美を与えることで勧善懲悪の趣向を表した。

第六章（「小枝繁の『景清外伝』における「崔猛」の影響について」）では、「大仏供養系」と「日向系」の二系統の「景清もの」を取り上げた。平家滅亡前に景清が季致の学生になって、季致の息子、季頼のために敵を討つ件りは小枝の創作であり、季致と季頼父子も新たに登場した人物であることを明らかにした。また、景清と季頼の関係、崔猛と李申の関係を掘り下げ、主人公が妻を奪われた人のために仇を殺し、妻を奪われた人によって恩返しするという構造に共通点があり、行文においても類似する部分が多い。ゆえに『景清外伝』季頼の件りは「崔猛」を踏襲して翻案したものであることを指摘した。小枝は「崔猛」を素材としているが、季頼は景清の友人として設定されており、原話の罪のない申妻を淫婦玉苗に改め、勧懲理念を強く表し、武士の「義」にふさわしいふるまいをとったことで景清の人殺しを正当化しようとした意図が明らかになった。『景清外伝』は上方読本の怪談短編集と大いに異なり、後期読本の代表として、日本の伝統的

な「景清もの」を大枠として「崔猛」の一部分を吸収した。これは「景清もの」の脱化であるが、「崔猛」を翻案することで、従来の「景清もの」における景清の敗残した英雄像を覆し、「義」のある武士という新たな人物像を作り上げたのである。

終章では、本研究のまとめと今後の課題について述べた。

江戸時代の後期は庶民全体が消費文化の頂点を極め、江戸が政治・経済・文化の中心として確立した時期であった。文化は全盛を極め、元禄期の上方を中心とした文人の文化に対し、より庶民的で享楽的な文化が爛熟していたのもこの時期であった。江戸の戯作はこの時期に盛時を迎えた。『莠句冊』や『凩草紙』という短編小説集における『聊斎志異』の翻案は庶民向けのものであるが、高い教養を要したため、大衆読者にとって作者の意図を十分に汲み取りつつ作品に親しむことは、必ずしも容易ではなかった。前期読本を楽しむ前提としているのは、一定の漢文素養を持っている読者、つまり草双紙を味わえるのと同程度以上の知識人読者の人々と見るべきであろう。

しかし大衆読者の増加には抗し切れなかったようである。そこには、読者の変化を受け止めた版元の意向が、少なからず働いており、『聊斎志異』は黄表紙や合巻という大衆向けの小説に吸収された。内容そのものには変化は少ないが、読本に比べて漢字の使用はごくわずかで、文章もわかりやすくなっている。このことは、以前の作品が大衆読者にとって決して馴染みやすいものではなく、しかしそうした人々を無視し切れずに取られた措置と見るべきなのであろう。『聊斎志異』の翻案作品から、江戸戯作の読者層が知識人から大衆へ変化していったことが窺える。

『凩草紙』の第二話「横河小聖悪霊を降伏する話」においてさらに重要なのは、寛政の改革がはっきりと意識されていることである。森島中良は、主人公、小弥太を文弱な書生として設定し、悪霊に殺害させ、蘇生したあと文と武を共に重視する人になると結んでいる。ここでは寛政の改革における幕府の文武両道の奨励という基本方針が正面から受けとめられているといってもよい。このような教訓性の肯定は、当局の意向に対する書肆の反応も相俟って、後期戯作における勧善懲悪の理念に結びついて行ったと考えられる。

寛政の改革の影響を受け、原話の怪異譚に存在しない勧善懲悪の趣向が加られたのものは一般的な手法である。『褄重思乱菊』、「狐精鬼霊冤情を訴ふる話」と『みめより草紙』はその例である。「大男」と「崔猛」はそもそも勧善懲悪を謳っている物語であるが、翻案作品においてさらに人物の善悪を明確にし、勧懲理念を強く表す教訓譚の機能が果たされた。『押絵鳥痴漢高名』は「書痴」における勧善懲悪の趣旨を捨てたが、その理由は原話の幕府への諷刺を避けるための対策と見るべきであろう。「求塚俗説の異同、塚の神霊問答の話」の政治理論を付与した前期読本に対し、戯作者による『聊斎志異』の改作が、寛政の改革の戯作に対する統制の歴史や作り手による自主規制の実態を知る多くの手がかりを与えてくれと考えられる。